

第21回「中国人の日本語作文コンクール」

日本大使賞受賞者訪日感想文

作文から始まった東京の一週間

大連外国語大学4年生

朱恒宇

日本語を学び始めてから、いつか日本を訪れてみたいとずっと思っていた。実際に使われている言葉を耳で聞き、教科書の外に広がる世界を自分の目で見てみたい。そして、授業や教材の中で何度も語られてきた日本という国を、自分自身の感覚で確かめてみたいと思っていた。しかし、まさかこのような形で日本を訪れることになるとは想像もしていなかった。

その機会を与えてくれたのが「中国人日本語作文コンクール」である。私は最優秀賞（日本大使賞）受賞者として、東京を訪問する機会をいただいた。出発前、今回の訪問がどのようなものになるのか何度も想像していたが、実際に一週間を過ごしてみると、そこで出会った人々や経験した出来事は、私の「日中交流」に対する理解を大きく変えるものだった。長年にわたって交流を支えてきた多くの人々と出会い、日中関係とは単なる外交の言葉ではなく、人と人との積み重ねによって築かれてきたものなのだと感じた。

その中でも特に印象に残っているのが、谷野作太郎先生（元駐中国大使）との出会いである。歓迎会で初めてお会いしたとき、私はまだ先生の経歴をよく知らなかった。九十歳という高齢で、髪は真っ白、話し方もゆっくりで、とても穏やかな印象の方だった。段先生に勧められて隣の席に座ったときも、「日中交流に関わる大先輩の一人」という程度の認識しかなく、礼儀正しく挨拶を交わしただけだった。しかし翌日、張先生から改めて紹介され、スマートフォンで名前を調べたとき、思わず息をのんだ。「村山談話の起草者の一人」という言葉が目に入ったからである。

「村山談話」は日中関係の歴史において重要な意味を持つ声明の一つである。その起草に関わった人物が、前日の夜、私の隣で静かな口調で「日中関

係を悲観してはいない」と語り、若い世代を励ましてくれていたのだ。その瞬間、歴史がまるで教科書の中から現実へと現れたように感じられた。これまで本で読んできた歴史はどこか遠いもののように思っていたが、歴史を経験してきた人が目の前で未来を語る姿を見たとき、歴史とは一人一人の人間によってつくられていくものなのだと実感した。長い年月の中で日中関係の変化を見てきた谷野先生が、それでも「悲観していない」と語ったことの重みを、私は強く感じた。

その言葉を胸に、私は日中友好会館で宮本雄二会長（元駐中国大使）にお会いした。宮本元大使はほとんどの時間を中国語で話してくださり、日中両国が歴史の中で互いに学び合ってきた関係であることを語ってくれた。日本は古代より中国から漢字や多くの文化を学び、近代には中国が日本を通して新しい概念や表現を取り入れたという。たとえば「～性」「～化」「～主義」といった言葉も、日本で生まれた翻訳語を通して中国語に取り入れられたものだという話を聞き、私は初めて言語という視点から日中関係を考えるようになった。普段何気なく使っている言葉の中にも、両国の長い交流の歴史が刻まれているのだと気づかされた。



訪問期間中には、朝日新聞社も訪れ、中村史郎会長とお話しする機会をいただいた。また、新聞のデザイン部門を見学し、デジタル時代におけるメディアの変化についても学ぶことができた。紙面の構成や情報の伝え方から、メディアが時代とともに進化していることを実感すると同時に、メディアが国と国との間で情報を伝え、相互理解を支える役割も担っているのだと感じ

た。さらに東芝国際交流財団も訪問し、企業や社会団体が国際交流の場を支えていることを知った。外交や学術だけでなく、さまざまな分野で人々が交流の場をつくっているのだと実感した。



こうした経験を通して、私は宮本元大使の言葉を思い出した。「国際環境がどのように変化しても、交流を続けることが大切だ。交流がなければ、理解も生まれません。」その言葉の意味を、この一週間の中で少しずつ実感するようになった。また日中教育会館では、日本語教育に携わる二十数名の先生方との交流会にも参加し、教育分野における交流の重要性を改めて感じた。

鳩山由紀夫元首相との交流では、この一週間の経験を象徴するような言葉にも出会った。それが「友愛」である。「友愛」とは、互いを認め尊重しながら関係を築いていく考え方であり、人と人が対話と理解を通して距離を縮めていくことを信じる理念でもある。その言葉を聞いたとき、国家関係の背後には常に人と人とのつながりがあるのだということを強く感じた。



実際、この一週間の中で私は多くの人がそれぞれの立場で日中交流を支えている姿を見ることができた。堀井巖外務副大臣（参議院議員）は流暢な中国語で若い世代への期待を語り、朝日新聞の平賀拓哉国際報道部次長は自由時間に秋葉原を案内してくださった。西田実仁参議院議員（公明党幹事長）は『クレヨンしんちゃん』の故郷について紹介してくれ、日本国際貿易促進協会の泉川友樹理事兼事務局長は私の出身地である広西について楽しそうに話してくださった。今年公明党代表に就任された竹谷とし子参議院議員も、私の日本語学習の経験に耳を傾けてくれた。こうした何気ない会話や交流の一つ一つが、日中両国の理解を少しずつ深めているのだと感じた。



また林芳正総務大臣との会談も印象的だった。長年日本外交に関わってきた政治家として、林先生は日中青年交流の重要性を強調し、若い世代の相互理解が両国関係の未来にとって欠かせないと語っていた。振り返ってみると、この一週間で出会った人々の立場はさまざまだったが、どの人もそれぞれの場所で対話の場を守り続けていた。



この経験は、私自身の役割についても考えさせてくれた。最初に作文コンクールに応募したとき、私はただ自分の考えを書きたいと思っただけだった。まさか日本を訪れ、多くの交流の担い手と直接話す機会を得るとは思っていなかった。私にできることは大きなことではないかもしれない。それでも日本語を学び続け、言葉を通して感じたことを書き続け、この経験を伝えていくことはできる。もし同じように行動する人が少しずつ増えていけば、人と人との理解もまた少しずつ積み重なっていくのではないだろうか。

日中交流は、多くの人々の長年の努力によって支えられてきた。二十年以上にわたり段先生と張先生がこの交流を支え続けてきたことも、その一例である。谷野作太郎先生が言うように、中国人日本語作文コンクールは「民を持って官を促す」交流の形の一つなのかもしれない。このコンクールは、日本語を学ぶ多くの学生に新しい世界への扉を開き、若い世代が日中交流に関わるきっかけを与えている。



訪日最終日、私はNHKの番組『波短情長』の収録に参加した。司会者から「一番好きな日本語の言葉は何ですか」と聞かれ、私は迷わず「一期一会」と答えた。人と人との出会いは人生で一度きりかもしれない。だからこそ、その瞬間を大切にす。東京で過ごしたこの一週間を通して、私は初めてこの言葉の意味を本当に理解できたような気がする。この一週間の出会いも、もしかすると人生で一度きりのものかもしれない。しかし、その出会いが私に見せてくれた世界はとても大きなものだった。

一期一会とは、出会いを大切にすという意味だけではない。その出会いから生まれた理解や思いを、これから先もつなげていくことなのだと思う。

段先生、張先生、本当にありがとうございました。中国人日本語作文コンクールがこれからも続き、より多くの若い人たちが言葉という橋を通して新しい物語を紡いでいくことを、心から願っています。